和睦と言う名の全面降伏。それを受けるようにとの内容だった。その人質として彼が彼人の元に来るようにとの旨が記されていた。
元服前の子供を人質に寄越すという話はよく聞くが、彼の家の石高自体は多くはないとはいえ、これでも祖父は武田二十四将にも数えられた小大名だ。それを次男とはいえ成人した男子をしかも、彼は今や彼の国の戦力の中枢となっている。
その彼を国外に出す事は国力の即低下に繋がる為、彼の国の重鎮達もすぐに良しとはしなかった。
彼自身も今の自分が国にいてもどうしようもないことは知っていた。彼はもう二槍を操ることはできない。ならばせめて、国の為になることをしよう。
彼はそう決心して、彼人の元へと向った。

「Ｗｅｌｃｏｍｅ。よく来たな。」
日が沈むころ、彼の国の一行は彼人の国着き、彼と幾人かの使者は彼人への謁見が許された。形式的な挨拶の後、彼以外の使者は退場を命じられた。
「幸村。ここに来い。」
彼人は御簾を挙げると、彼に彼人の元に来るように命じた。
そして、同時に彼人の腰元を御簾の向こう側に下がらせた。
「武田から持ってきたモン。全部そこに置け。」
彼は彼の帯びている太刀、懐紙、財布等、持ち物全てを置いた。
「まだだ。着物も武田のモンだろ。」
彼人の前だけでなく、彼人の臣下の前で全裸になれと命令された。
だが、彼にはその命令に逆らう理由はなかった。
彼は全ての衣類を脱ぎ去り、場違いなほどの全裸となった。
「まだ、あるじゃねぇか。」
彼人は彼の首にかかっている六文銭を指した。
「こ、これだけはご勘弁願いまする。これは某の家の誇りでございますれば。」
「わかった。じゃあ、別のモン出してもらおうか。」
彼は彼人が何を指しているのかもわからなかった。
「せめて、御簾は下げてやるよ。Ｃｏｍｅ　ｏｎ」
彼は彼人の喋る言葉はわからなかったが手招きをされ、御簾の奥へと進んだ。彼の背後で御簾が下ろされる。彼人の家臣達側の行灯が消される。故に、彼は御簾の向こうがどうなっているのか幸か不幸か分からなかった。
「腹の中のモン、全部出したらソレを持ち込むのを許可してやる。」
彼の足元がガラガラと崩れていくのが聞こえた。
彼に拒否権は無い。
「ここに這え。幸村。」